１５	豊川	豊川小学校	ハヤシ　ショウタ 名前　林　翔太

分科会番号	３	分科会名	社会科教育（小学校）

研究題目

社会的な見方や考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業
～４年社会科『どうする私たち～水害から私たちはどう生きるか～「風水害からくらしを守る」』の実践を通して～

１　はじめに

豊川市では研究テーマ「社会的な見方や考え方を働かせ、仲間とともによりよい社会づくりへの参画をめざす社会科の授業」について、以下のように捉え研究をすすめている。

「社会的な見方や考え方を働かせ」
「社会的な見方や考え方」とは、社会的事象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して考え、比較・分類したり、総合したりして、地域の人々や国民生活と関連づけた姿と捉える。
「仲間とともに」
「仲間」とは、学級の子どもたちだけでなく、学びを通してかかわる全ての人と捉える。さらに、仲間とともに考えを認め合い、高め合う場を重ねることを通して、自分自身の考えを深めていく姿と捉える。
「よりよい社会づくりへの参画をめざす」
「よりよい社会」とは、そこにかかわる人々にとって幸せを感じられる社会と捉える。「よりよい社会づくりへの参画を目指す」とは、目の前の問題や、これから起こりうる問題の解決への意識を高めたり、行動へのきっかけをつくったりする「参画していこうとする」姿と捉える。

２　研究の内容と方法

（1）単元について

本単元は、自然災害から人々を守る活動について、過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、聞き取り調査や資料を通して調べ、災害から人々を守る活動の働きを考え表現することを通して、地域の関係機関や人々は、自然災害に対し様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解したり、自分たちにできることを考えようとしたりする態度を養うことを目的としている。

豊川市立東部小学校は、校区に豊川が流れており、令和５年６月２日の大雨により通学路が冠水してしまうなど、様々な被害があった。またこの校区には、400 年ごろ前に作られたとされる、霞堤と呼ばれる堤防があり、かつては遊水地として大雨のたびに水に浸かってきた地域である。そのため水屋やホソバ、だんべ船など様々な工夫をして、水害を乗り越えてきた。そして先人たちの苦労や願いにより豊川放水路が完成し、大きな水害から守られるようになった歴史がある。そこでその当時の暮らしや住民の葛藤を調べていくことで、先人の努力や苦心のおかげで水害から地域が守られ、人々の生活が向上してきたことに気づくことができるだろう。また現在も豊川があふれたときには校区の多くが水に浸かってしまうことが想定されている。昔のことを勉強したうえで今の防災について学ぶことで、自分たちの校区は水害と関係が深い地域であることに気づくことができるだろう。そして過去と現在の水害対策を比べながら学習を進めることで、自分たちの対策の課題点が浮かび上がり、一人一人が対策を考えないといけないことに気づくことができるだろう。そしてこの教材を通し、自分たちの住む地域と水害のかかわりに関心をもち、水害からより安心してこの校区で生活するために、「自分たちにできることはなんだろう」という思いをもち、よりよい社会づくりへ主体的に参画できる力を育んでいきたい。そのため、本単元では、「よりよい社会づくりへの参画をめざす姿」をさらに具体化し、自分たちにできることを考え、行動しようとする姿をめざしていきたいと考えている。

単元を通して、洪水や霞堤のことをよく知る地域の方や、市役所、河川事務所の方をゲストティーチャーとして招き、水害対策について直接かかわりながら教えていただく機会を多く設定する。当事者に話を聞くことで、より一層水害対策についての意識が高まるだろう。また、校区のハザードマップの作成を行うことで、校区の中でも予想される被害を明確にし、自分たちにできることをしなければと、切実感をもって対策を考えることができるだろう。マイタイムラインの作成時には、作ったタイムラインの工夫をペアやグループ、全体で話し合わせることで、その一人一人の計画のよさに気づくとともに、一人一人が自分の状況に合わせた対策が必要であることに気づくことができるだろう。市役所の危機管理課の方、消防団の方、地域の方、家族、身近な友達と対話をしながら防災について考えることで、自分たちの地域と水害の関係に関心をもち、この校区で安心して暮らしていくために、一人一人が、そして地域と協力して防災について考えることができるようにしたいと考えた。

（2）めざす子ども像

地域社会の課題を自分ごととしてとらえ、仲間とともに、自分たちにできることを考え、行動しようとする子

（3）研究の仮説と手立て

【仮説】
身近な地域で過去に起きた災害や今後起きる可能性がある災害をとりあげ、過去と現在の災害対策を直接見たり、比較したり、災害を詳しく知るゲストティーチャーと学ばせたり、実際に起きるかもしれない被害を想定したりすることで、地域社会の課題を自分ごととしてとらえ、自分たちにできることを主体的に考え行動しようとすることができるだろう。

【手立て】
①身近に起きた令和５年６月２日の大雨から単元を展開することで、この校区は水害に弱いのではないかという切実感をもたせ、今後の学習への意欲を高め、水害を自分ごととして捉えられるようにする。
②単元を通して、水害について詳しく知る人に出会わせ、その方々の工夫や努力を発見していくことで、より安全な社会を目指していることに気づき、水害が自分たちの身近な問題であることを実感し、自分たちにできることを考え行動しようとする意識を高める。
③地域に残る霞堤や過去の水害対策の様子を見学したり、昔と現在の水害対策との違いを考えたりすることで、水害を自分ごととして捉え、自分たちにできることがないか考え、実際に行動しようとする意識を高める。
④実際の被害を想定する機会として、ハザードマップやマイタイムラインを作成することで、起きるかもしれない被害を自分ごととして考えやすくし、自分たちにできることを考え実際に行動しようとする態度を養う。

（4）抽出児について
A児は、前単元「ごみの処理と利用」で、社会科見学において、積極的にごみの処理について質問したり、学級でごみを減らすための方法を発表したりする様子が見られた。しかし、単元の終末、実際に自分たちでごみを減らす活動を行う時には、「わたしたちだけやってもあまりごみの量は変わらないのではないか」と語り、あまり前向きに考えることができなかった。これは、ごみの問題を切実感をもって自分ごとしてとらえることができなかったことが原因であると考える。本単元で、水害を切実感をもって自分ごとと考えることができれば、自分たちにできることを考え実践していく姿を見ることができるであろうと考え、本実践の検証に適当だと考え抽出児に設定した。

３　研究の実践

（1）第１時　東部小校区は水害に弱いのだろうか。
単元の導入として、令和５年６月２日の大雨の様子を思い出させ、各自家の周りの被害の様子の写真や動画（資料１）を持ち寄り、東部小校区の水害について考えるきっかけとした（手立て①）。車が水に浸かってしまっている様子や家の１階部分が水に浸かってしまっている様子が見られた。A児のふりかえりには「東部小校区は弱い。大雨でちょっと雨がふっただけでも水にうもれてしまったりするから。」と記していた。他の児童も、「６月２日は被害がたくさんあった。備えをしたい。」と記しており、水害を自分ごととして考えている様子が伺えた。

資料１　児童の家のまわりの被害の様子

（2）第２時　東部小校区はどのようにして水害から守られているのだろうか。
前時でこの校区は大雨が降った時には水に浸かり、大きな被害が出てしまうことを学んだ。しかしその一方で地域にある大きな川、豊川は氾濫せず、最悪の被害である死者は出なかった。そんなところから、単元を通して学んでいく学習問題「東部小校区は、どのようにして水害から守られているのだろうか」を設定した。A児からは学習問題に対して「なぜ豊川は氾濫しなかったのだろう」「豊川が氾濫してしまったらどんな被害が出てしまうのだろう」「どんな備えをしたらいいのだろう」という疑問が上がり、地域の水害対策に興味を示していることがわかる。

資料２　今から９０年前の被害の様子

（3）第３時　東部小校区の過去の水害の様子を調べよう。
A児同様、前時のふりかえりで、「豊川が氾濫したらどうなるのか。」という疑問をもつ子が多くおり、過去に起きた水害から被害を調べることにした（手立て③）。水が来て屋根に避難している様子や、神社の常夜灯が水に浸かっている資料（資料２）を見たA児からは、「わたしは当古に住んでいるので当古をさがしたら、ひめかい道がものすごいうまっていたり、人が屋根にひなんしていたので、びっくりした。」と昔の被害に驚いた様子であった（資料３）。この校区が昔から水害にあっていたことをほとんど知らない児童ばかりなので、多くの子から驚きの声があがった。そして、資料の中に「当古、院の子、土筒を犠牲にするような霞堤」という言葉が出て来ており、通学路に霞堤があることを知っている児童の、「通学路にあるから見に行こう」

わたしは当古に住んでいるので当古をさがしたら、ひめかい道がものすごいうまっていたり、人が屋根にひなんしていたので、びっくりした。
昔から水害は多い
なぜこんなにひがいが多いのか。
昔の人って水害ってどうやって水害から生きていたの？
かすみ堤と言うのはどんなものなのか、など、まだまだわからないことを校区探検で自分の目で見てあたまにわからせようと思います。
資料３　A児のふりかえり

という発言をきっかけに、次時は地域に残る霞堤を見学することになった。また、A児は「なぜこんなにひがいが多いのか」という疑問をもち、「まだまだわからないことを校区探検で自分の目で見てあたまにわからせようと思います。」と見学に対する意欲が見られた（資料３）。

（４）第４・５時　霞堤について調べよう。

前時で疑問にあがった霞堤や地域に残る水害に関するものの見学に出かけた（手立て③）。校区の通学路には何百メートルにもわたり、霞堤が続いている。普段は何気ない景色の一部だと思っていたものが、昔の水害対策と関係のある霞堤だと知った児童はとても驚いていた。また、「堤防なのに近くに川がないのはなぜだろう。」「何のためにこの場所に堤防を作ったのだろう」と新たな疑問が生まれた。そして、霞堤には看板が立っており、その役割の説明を見つけ、４００年以上前下流の吉田城と城下町を守るために作られたもので、東部小校区はわざと水を流し込む遊水地になっていたために昔から水害があったことを知った。また、水害対策の一環である水屋とホソバが残る黄木氏宅を訪れ、水屋とホソバを見学させていただいた（手立て③）。そして資料に載っていた９０年前被害があった神社の鳥居と常夜灯を訪れ、今と昔の写真を比べてどの位置まで水が来ていたのか指を指しながら確認する様子が見られた（資料４）。他にも水屋やホソバも確認できた。A児のふりかえりには、「今まで（水害のことを）あまり考えてこなかった。」「水につかった神社も見に行き、自分たちより高かった。水屋で石がつみあげられていても、こわいと思った。」と記しており、驚きと共に、少し怖さも感じているようであった（資料５）ことから水害を自分ごととして考えている様子が伺えた。そして、当時の人たちはどのような対策をして生活していたのか疑問に思う子がたくさんいた。

資料４　現在の神明社と昔の神明社の被害の様子を比べる児童

石がたくさんつんであって、少し高いところに住んでいる人もいれば、木などでかこんである家もあって、今まで（水害のことを）あまり考えてこなかった今回の見学でよくわかりました。
水につかった神社も見に行き、自分たちよりも（水につかっているところが）高かった。水屋で石がつみあげられていても、こわいと思った。

資料５　A児のふりかえり

（５）第６・７時　過去の水害が起きていたときの暮らしについて調べよう。

前時でたくさんの水害の被害にあっていた昔の人たちはどのように生活していたのだろうという疑問が出たので、校区（当古町）に住む権田さんにお話を聞く機会を設定した（手立て②）。権田さんは、「水害に備えて、石を高く積んだ水屋や避難用の船はたくさんあった。多くの人は農家で一生懸命働いていたが、何度も水が来る。せっかく一粒ずつまいた種も全て流されてしまった。ひどい時には家の前まで水が来て、２階から手が洗えるほどだった。水が引いた後は子どもも流木を片付けを手伝った。大人たちは、大きな被害やそのあとの生活苦に嘆いていたが、子どもはたらいの舟やイカダで遊んでいた。１９６５年に豊川放水路が完成し、当古地区は洪水を免れ、地域が発展した。」と話された。話の最後に子ども達に向けて「自分の判断力を養って、空振りでもいいから行動を起こしてほしい。水害に合わないように気をつけてほしい。」とメッセージをいただいた。

権田さんのお話を聞き、A児は「昔の人たちみたいに」と水害を乗り越える苦労に共感するなかで、身近な問題であると実感し、「自分たちでできることを備えたい」と水害対策に向け、自ら考え行動しようとする思いを持ち始めていることがわかる（資料７）。

皆さんは今回の大雨で避難しましたか。避難した人もいれば、避難しなかった人もいる。今は、異常気象もあり、大雨がたくさんある。「誰かが避難するからする」「あの人はしないから僕もしない」「自分の判断力を養って、空振りでもいいから行動に起こしてほしい。水害に合わないように気をつけてほしい」

資料６　権田さんのお話

T:権田さんの話を聞いてどんなことを思いましたか。
C１：権田さんの話を聞いて、昔の人は水害に備えて、自分たちでたくさんの備えをしていることがわかった。
C２：せっかく育てた野菜が流されてしまってかわいそうだと思った。
A児：昔の人たちみたいに、自分たちでできることを備えたいと思った。
C３：今水害が起きたらどんな被害があるのかな。自分も水害のときは、避難したいと思った。

資料７　権田さんのお話を聞いた感想

（６）第１２・１３時　今水害が起きると東部小校区はどんな被害があるのだろうか。

昔の被害を調べることで、切実感の高まりから「水害が今起きたらどうなってしまうのか」と自分ごととして考える児童が多くなった。そこで、豊川市のハザードマップを使用し、校区のハザードマップを作成した（手立て④）（資料８）。豊川が決壊した場合、校区のほとんどが１m～３m水に浸かる。そして校区の３分１ほどは、３m～５m も水に浸かってしまうことがわかった。またその高さが実際に来てしまったら、家のどの辺りまで水が来るのかを、紙テープで長さを測り、家だとどのくらいなのかも調べることにした（資料９）。

A児の家は３～５m も水が来てしまう地域である。２階の真ん中ぐらいまで水が来ることがわかったA児は、

資料８　校区のハザードマップ

資料９
紙テープで実際の被害を想定（A児宅）

「どうもこうもならない」「分からない」から「心配」と水害が切実感ある課題であると感じている。また、「命を落とすかもしれない」から「怖い」という思いからは、自宅の地理的な特徴から、被害を想定することで、水害をより自分ごととして捉え、対策を学びたいという思いをもっていることがわかる（資料１０）。

また、もっと水害について切実感をもたせるために、６月２日に東部小校区よりもさらに被害が多かった地区（一宮町）に住む大高先生と牧野先生に被害の様子をお話いただく機会を設けた（手立て②）。大高先生の話では、「道路は車の半分ぐらいの高さまで水に浸かり、家は床上まで浸水した。たたみやカーペット、家具など軽トラック２台分のものを処分しなくてはいけなかった。泥水が流れて来るので、それを拭くのも大変だった。家で寝ることはできずに小学校の体育館に避難した。みんなには、どこに川があるのか、どこが水が溜まりやすい場所なのか、今回の雨での経験を生かして次の大雨に備えてほしい。」という内容であった。また、牧野先生のお話では、「実家の畑やビニールハウスが水没してしまい。機械も壊れてしまった。被害額は数百万円かかる。」という内容であった。身近で被害にあった当事者から話を聞いたA児は、災害をより自分と関係のあるものであると感じたようで、「命というものをなくしてしまう」「こわいことだらけでほんとうにいや。」「水害たいさくをもっと強くしたい」とふりかえりに記しており、実際の被害の話を聞いたことにより、より水害を自分ごととしてとらえ、行動しようという思いを強くしている様子が伺える（資料１１）。

（7）第１４時～１７時　水害から身を守るために、だれがどのようなことをしているのだろうか。

１４時では、水害に備えて自分たちがどれくらい備え（自助）をしているかを考えた。アンケートの結果（資料１２）、単元前は対策をしているのは２名だけであったが、第１４時の時点では１１人にまで増えている。行なっている対策は非常食の準備や水の準備、避難リュックの準備などそれぞれ数人ずつで、まだまだ対策ができていないのが明らかになった。A児のふりかえりには、自分の家か対策をしていなかったことに対し「くやしかった」と感じ「たりない」から「しらべたい」と今のままではダメで対策をしなければという強い思いが表れていると考える（資料１３）。

１５時では、市役所の危機管理課の方に事前にインタビューをさせていただき、書面で返事をいただいたものをもとに、市が行ってくれている対策（公助）について考えた（手立て②）。豊川市では、ハザードマップの配布や防災訓練、防災センターの設置、避難情報の配信、防災アプリなど、国や地域と協力をして、たくさんの対策を講じていることをほとんどの児童は知らず、市が行ってくれている対策を自分たちが活用していないことに気がついた。A児は、市が行ってくれている対策だけで「大丈夫なのかな」、と批判的にみており、市の対策だけでは、不十分であると感じていることがわかる。（資料１４）。

１５時で市役所の方がたくさんの対策を行ってくれていることを知り、他にも公助はないのか疑問を持っていたため、１６時では、国土交通省豊橋河川事務所の方をお招きし、国がどんな対策（公助）を行っているのか、教えていただいた（手立て２）。A児のふりかえりからは、河川事務所の方の話（資料１５）を聞き、「公助も大切なんだな」とたくさんの対策のおかげで安全を保とうとしてくれている一方で、「堤防のせっけい」など公助にも限界があることを知り、頼りすぎてはダメで「自助や共助、公助の三つともたいせつで、おぼえておかないといけない言葉」であることに気がついたことがわかる（資料１６）。

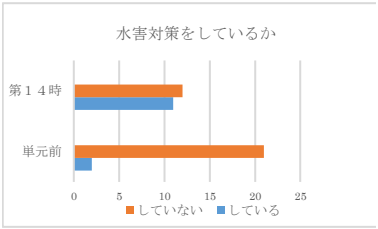
河川事務所の方の話の中で共助の必要性も教えていただき、１７時は共助について調べていくことにした。１７時では、地域の消防団を務める児童の父親や校区の各連区長さんに書面と電話でインタビューに答えていただいた（手立て②）。消防団は、年に一度の水防訓練を行い、大雨のときには、見回りを行なっている。また大雨時は川が溢れるとすぐに身動きが取れなくなるため、すぐに避難する必要があるとのこと。各連区長さんの話では、地域では市民館に非常食を準備している程度で他に大きな備えはしていない。豊川放水路が出来てからは、大きな洪水は起きておらず、安全は確保されているので、そこまで準備はしていないという回答であった。これまでの学習で共助の必要性も考えてきたA児のふりかえりには、

紙テープで調べたら、もう家の２階まできたので、どうやってぬけ出そうにもどうもこうもならないので、どのような災害準備をしたらいいのか分からないので心配です。備えも分からないなんてどうすればいいのも分からないし、命を落とすかもしれないからいろいろ考えると怖いです。これからいろいろそういうのを学びたいと思います。

資料１０　A児のふりかえり

じっさいそんなことがおこったら、テレビとかも、もしくは、いちばんだいじの命というものをなくしてしまうかもしれないし、もうこわいことだらけでほんとうにいやです。水害たいさくをもっと強くしたいです。

資料１１　A児のふりかえり



資料１２　水害対策アンケート

自分ちはぜんぜんしていないので、なんかくやしかったです。でもここまでやってもなにかものたりない気がする。なにがたりないかしらべたいです。

資料１３　A児のふりかえり

T：市役所の人の話を聞いてどんなことを考えたかな。
C１：豊川市がこんなにたくさんの対策をしているなんて知らなかった。
C２：ハザードマップや防災アプリは聞いたことがあったけど、使ったことがなかった。
A児：協力して対策はしてくれているけど、レベル５のときでも大丈夫なのかな
C３：自分たちの行動も大切だね

資料１４　市役所の方の話を聞いて

河川事務所では、堤防や豊川放水路の管理を行い、河川のパトロールを行っている。対策は講じているが、公助には限界があり、日頃から準備を行っていてほしい。自助を大切にしてほしい。

資料１５　河川事務所の方のお話。

自助や共助もたいせつだけど、公助も、たいせつなんだなと思いました。でも堤防にもげんかいがあり、堤防のせっけいもげんかいがあることをあらためて考えてみると、やっぱりきかいや頭にたよりすぎてはいけないし、たよりすぎたらぎゃくにまずいことになるので、自助、共助、そして公助の三つはたいせつで、おぼえておかないといけない言葉だと思いました。

資料１６　A児のふりかえり

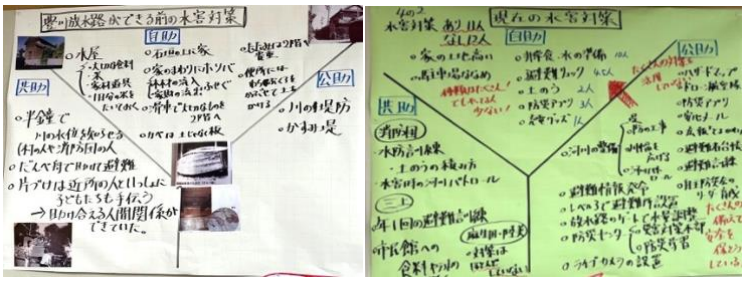
「昔とちがって訓練ぐらいしかしてなかった」と共助の予想以上の取り組みの弱さから「不安」を感じていることがうかがえる。そして、今までの学習を活かし、公助に頼りすぎており、「もう少しいいから」と共助でも何かやらなければいけないのでないかという自分たちにできることを考え行動していこうとする思いを強めたことがわかる（資料１７）。

実際いろいろ準備しているのかなってきたいしたけど、共助は、昔とちがって訓練くらいしかしていなかった。放水路にたよって、大きなさいがいがおきたらどうしようか考えると不安。共助はいがいに少なくておどろいた。もう少しでいいから考えたらと思った。
資料１７　A児のふりかえり

（８）第１８時　昔（放水路完成前）と今の洪水対策をまとめよう

現在の水害対策を学んだところで、昔と現在の水害対策を自助・共助・公助に分けてＹ字チャートでまとめた（資料１８）。Ｙ字チャートにまとめると、昔の自助や共助の多さ、反対に公助の少なさが明らかになった。現在については、公助が多く、自助もあるがやっている人が少ないことに気づく子が多くいた。

（９）第１９時　東部小校区の水害対策を昔と比べて評価しよう



資料１８　現在と昔の水害対策のまとめ

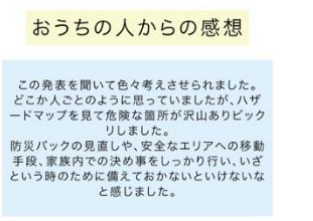
ここまでの学習でA児は自分たちで水害対策をしなければいけないと考えているが具体的に何を行えばいいのかが明確になっていない様子であった。そこで、昔と現在の水害対策を比較して、現在の水害対策を評価させることで、現在の対策の課題を見出し、水害を自分ごととしてとらえ、切実感をもって自分たちでできる対策を考えられるようにした（手立て③）。授業では、現在の対策を昔と比べて「とても安心」「少し安心」「変わらない」「あまり安心できない」「全然安心できない」の５段階で評価させ、話し合った。学級全体では「とても安心」が２名、「少し安心」が１５名、「あまり安心できない」が３名という結果であった。A児は昔は「公助は少なかった」が、自助や共助で「みんなで助け合って」いたという取り組みによさを感じる一方で、現在は自助を、「やっている人は少ない」ことや、共助も「水害にたいしてのことははやっていない」、「公助はめちゃめちゃ多いけど（防災）アプリはインストールしていないから、じっさいにおきたらどうしようと思うところがある」という理由で「あまり安心できない」を選んでいる（資料１９）。話し合いの場では、多くの子が「昔と比べて～」と時間軸で水害対策を評価することができていた。また、自分の地域の特性（空間的要素）を踏まえて、判断している児童も多くいた。授業の後半では、自分たちができる対策を考えた。A児は「近所で助け合える人間関係をつくる」と共助に目を向けて発言した。しかし名前も知らない人が多いことから、「恥ずかしいと思わないために、常にあいさつをしたり声をかけれるようにしておく」と発言し、自分ができることを具体的に考えることができ、実際に行動しようとする姿がうかがえた（資料２０）。

あまり安心できない
（放水路が）できる前とげんざいをくらべると、できる前は、公助は少なかったものの共助は、みんなで助け合って水がひいたときのそうじをしたり、はんしょうでしらせたり、だんべ舟で人を助けたりしていて、もちろん、自助も水屋、石垣の上に家、たたみは2階へ、ホソバ、トイレにはわらぶくろ、いろいろしていたのに、げんざいは、自助はいっぱいあるけど、やっている人は少ない。共助は放水路ができたからって、水害にたいしてのことはやってないし、公助はめちゃめちゃ多いけど、(防災)アプリはインストールしてないから、じっさいにおきたらどうしようと思うところもあるのであまり安心できない。
資料１９　A児の評価

A児：近所で助け合える人間関係をつくる
T：近所の人の名前はわかる
A児：知らん
T：お年寄りにやってあげれることある
C１：避難所とかグッズを教えてあげる。
A児：恥ずかしいと思わないために常にあいさつをしたり、声をかけれるようにしておく。
C２：相手の性格とかを知っておく
資料２０　自分たちにできそうなこと

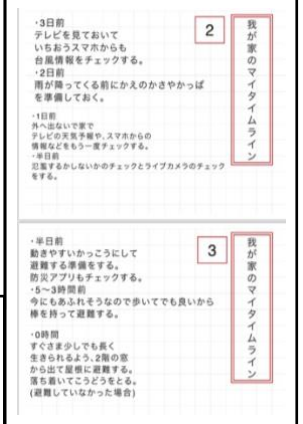
（１０）第２０・２１時　我が家の洪水対策プレゼンテーション

ここまで学んできたことのまとめとして、我が家でできる洪水対策を家族に向けてプレゼンテーションを行なった。A児は避難リュックに入れるものや避難所までの安全な避難経路の紹介、マイタイムライン（手立て④）をもとに、家族に災害時の想定される被害を伝え、具体的な行動を提案した。自宅の地理的な要因（空間軸）から、堤防のそばにあるため、すぐに避難しなければいけないと伝えることができた（資料２１）。プレゼンテーションを受けて、保護者からで、「他人事のように思っていたが、ハザードマップを見て、危険な場所がたくさんあり、びっくりした。防災バックの見直しや、安全なエリアへの移動手段、いざという時のために備えておかないといけないと思った」という感想をいただき、A児が自分たちにできることを行ったことが、家族の防災意識を高めたことが分かる（資料２２）。プレゼンテーション後には、実際に防災リュックの中身を買いそろえたり、非常食を買って食べてみたことを学級に紹介する児童もおり、学級全体を見ても自分にできることを主体的に行おうとする様子がふえてきたことが分かる（資料２３）。



資料２２　プレゼンテーションを受けた保護者の反応

資料２３　実際に行なった対策の紹介



資料２１　A児のプレゼンテーション（マイタイムライン）の抜粋

（１１）２２時・２３時　他学年や地域に防災のことを伝えよう。

家族に自分たちができそうな対策を広めた子どもたちは、他学年の子や地域の方にも防災のことを広めたいという思いをもった。そして、ペア学年の２年生に紙芝居で水害対策について伝えることにした。A児は昔の人たちの被害と行っていた自助を伝え、「昔の人たちは自分たちで水害に備えをしていました。私たちも自分たちにできることをやりましょう。」と伝えることができた。これは、A児が自分にできることを主体的に行動した姿であると考える。

また地域に向けては、防災新聞を作成した（資料２４）。地域ごとのハザードマップを載せ、それぞれの地域の特徴にあわせて、危険なところを伝えたり、防災リュックに入れるとよいものなど、それぞれができそうな対策の紹介を精力的に行った。このような姿は社会科の学びを活かし、地域社会の課題を自分ごととして捉え、自分たちにできることを考え行動した姿であると私は考えている。

資料２４　防災新聞

４　研究の成果

今回は、授業の節目節目で６月２日に起きた大雨を振り返ることができた（手立て①）。児童が生まれて初めて経験した大雨は非常に心に残るもので、あの雨よりもひどい雨が降ったらどうなるのだろう、あのときよりも被害が出てしまったどうしようという切実感をもって、自分ごととして水害対策を学ぶ姿が見られた。川のすぐそばに住むA児にとってはより切実に対策を考えたいという思いが見られた。児童が体験したことをタイムリーに教材化し、児童の切実感に繋がったことから、手立て①が有効であったと言える。

第４・５時では、地域に残る水害対策を見学に行き、昔の対策を自分の目で確認し、被害の様子も知ることができた。そして第１８時では、昔と現在の対策を比較したことで、多くの子が昔と比べ自助や共助の少ないことに気づき、現在の課題であることを理解することができた。そして昔の対策をヒントに自助や共助でできることはないか、真剣に考え、取り組もうとしている様子は、水害が自分たちの身近な問題であることを実感し、自分たちにできることを考え行動しようとする姿であり、手立て③が有効であったと言える。

単元を通し、第４・６・１３・１５・１６・１７時で合計１０名以上のゲストティーチャー（仲間）との関わりがあり、昔の被害の様子や現在の被害、対策について教えていただいた。その被害を受けた当事者の生の声を聞くことで、より水害を身近なこととしてとらえることができ、対策を行なっている人からの数々のアドバイスによって、今しなければならないことが明確になった。またさまざな人が協力して水害対策を行い、安全を保とうとしていることに気づいた。A児も同じ地域に住む権田さんの話により、自分の住む地域がいかに水害の被害にあってきたかを知り、切実感をもって対策を考えようとしていた。また、河川事務所の方からのアドバイスで、マイタイムラインを作成し、それを家族に伝え、実際に行動しようとしている姿は、自分たちにできることがないか考え行動しようとする意識の高まりであり、手立て②が有効であったといえる。

また、ハザードマップの作成や紙テープを使った被害の想定、マイタイムラインの作成では、より具体的に水害時の様子を想像することができた。A児は紙テープで予想される浸水の高さを確かめることで、家の２階の真ん中あたりまで水がきてしまうことが分かり、水害時には早めに避難しなければいけないことを家族に伝えることができた。これは実際に被害を想定したからこそわかったことで、被害の想定やハザードマップの作成（手立て④）が自分ごととしてできることを考え行動しようとする姿につながったことから有効であったと言える。

A児は第２０・２１・２２・２３時で家族に想定した被害をもとに、具体的な対策方法をプレゼンテーションしたり、他学年や地域にその情報を広めたりするなど、自分にできることを考え行動しようとする姿があった。そこには、社会的な見方考え方を働かせ、多くのゲストティーチャー（仲間）との関わり（人々の相互関係）、過去や現在の対策を見学し比較し（時間的）、自分の住む地域（空間的）に起こりうる被害を想定したという経験が支えとなっていると言えるだろう。よって本実践の４つの手立てが有効であったと考える。

５　おわりに

本単元を行うにあたり、子どもたちは多くのゲストティーチャーとの出会いによって、水害からどう身を守っていけばよいのかを知り、自分にできることを考え実践しようとする姿があった。出会いの場を設定するのはとても大変であったが、それだけ子どもが社会のことを学ぶのにとても有効であったと感じた。

また単元の終了後には、水害対策をもっと広めるために学習発表会で全校児童や地域の方にこの校区と水害との関わりや想定される被害、自分たちにできる対策を伝えた。災害といういつどこで起きるかわからない事象について、やらなければと思っていても行動できないことが多い対策を、本実践では、子どもたちが切実感をもって取り組み、自分にできることを考え地域に伝えようと社会に参画していこうとする姿があり、とても頼もしく感じた。今後も子ども達が身近な社会の問題を自分ごととして捉え、社会参画していけるような授業を行なっていきたい。